

源氏物語でのタラズ形・ラズ形

——ザリキ形・ザリツ形・ザリケリ形との比較を中心に——

西 田 隆 政

Tarazu-form, Razu-form in The Tale of Genji

——Mainly the Comparison with Zariki-form, Zaritsu-form, Zarikeri-form——

NISHIDA Takamasa

Abstract : In The Tale of Genji, the use example of Tarazu-form, Razu-form is fewer than that of Zariki-form, Zaritsu-form, Zarikeri-form. Moreover, there is Tarazariki-form and Razariki-form that is the compound type with auxiliary verb Ki in these. Judging from this respect, the difference of the function in the sentence can be expected to be Zariki-form to Tarazu-form and Razu-form. In addition, Tarazu-form and Razu-form is little thing used with the end of sentence, and is different this respect from Zariki-form. Tarazu-form and Razu-form decide Tense of the sentence. In The Tale of Genji, Tarazu-form and Razu-form is not accident of the main female, and is thought to be accident that shows that a negative state exists the story specifically unlike Zariki-form, Zaritsu-form and Zarikeri-form by doing Tense and Aspect in a negative expression.

要旨 : 源氏物語でのタラズ形とラズ形は、ザリキ形・ザリツ形・ザリケリ形と比較すると、その使用例がすくない。また、これらには助動詞キとの複合形である、タラザリキ・ラザリキ形がある。この点からすると、タラズ形・ラズ形とザリキ形とでは、文中での機能のちがいのことが予想される。さらに、タラズ形・ラズ形は文末で使用されることがほとんどなく、この点でもザリキ形などとはことになっており、文のテンスを確定させる機能もたないことがわかる。源氏物語でのタラズ形・ラズ形は、ザリキ形・ザリツ形・ザリケリ形とはちがひ、否定表現でのテンス・アスペクトをしめす主要な語形でなく、物語のある時点のなんらかの否定的な状態をしめすものとかがえられるのである。

1 はじめに

さきに、西田(2007)において、源氏物語のザリキ形・ザリツ形・ザリケリ形の使用例の使い分けについて、検討おこなった。これらの語形は、いずれも、否定表現でのテンス・アスペクトをしめすものであり、それぞれ、ザリキ形が過去の時点における否定的事態、ザリツ形が過去から継続していた否定的事態の終了、ザリケリ形が話し手の過去の否定的事態に対する

「感慨」をまじえた再確認の意味をになっていることを指摘した。

本稿でとりあげる、タラズ形とラズ形は、完了の助動詞とされるタリトりに否定の助動詞ズが接続したもので、おなじく否定表現でのテンス・アスペクトをしめすとかがえられるものである。

本稿では、以下、源氏物語におけるタラズ形とラズ形の使用例を概観し、その特徴について検討していきたい。なお、助動詞ズと同様に文法的否定をあらわす、助動詞ジと接続助詞デもあわせて調査することと

する。

2 タラズ形とラズ形の使用数

源氏物語でのタラズ形の使用例は、連用形タラズが12例、連体形タラヌが14例、已然形タラネが1例、タラザリキ形が1例、タラザナリ形が1例、タラザメリ形が1例、タラヌナルベシ形1例の計31例である。さらに、助動詞ジとの複合形タラジ形が3例、接続助詞デとの複合形タラデ形が1例で、合計37例である¹⁾。

また、おなじく、源氏物語でのラズ形の使用例は、連用形ラズが4例であるが、終止形の可能性のある例もある。連体形ラヌは2例である。複合形ではラザリキ形が2例であり、接続助詞デの下接したラデ形が1例で、合計9例である。

この使用例からすると、タラズ形・ラズ形ともに、使用数がおおいものではないことが理解される。西田(2007)の調査での、ザリキ形152例・ザリツ形46例・ザリケリ形178例と比較すると、あきらかに少数である。

しかし、助動詞タリ・助動詞リの使用数自体は決してすくないものではない。上田他編(1996)別冊のデータでは、源氏物語中には、助動詞タリが4348例、リが3415例ある。上記の否定形助辞との共起例は、タリが37例で0.9%、リが9例で0.3%で、否定表現での使用例が1パーセントにもみえない。

それに対して、助動詞キは3155例のうちザリキ形は152例で4.8%、助動詞ツは1509例のうちザリツ形は46例で3.0%、助動詞ケリは3637例でザリケリ形は178例で4.9%である。これらの否定表現での使用例は、3%から5%と、ある程度の使用比率をしめる。

この点からすると、助動詞タリ・リは否定表現で使用されること自体が例外的であり、その点では、キ・ツ・ケリとは、まったくことなる使用傾向であることが理解される。

そこで、次章以下では、タラズ形・ラズ形の使用例をあげて、その具体的な使用状況を検討していくこととする。

3 タラズ形・ラズ形の使用例

3-1 タラズ形の使用例

以下、タラズ形とタラデ形とタラジ形の使用例を、

その活用形ごとにあげる。

タラズ形-タラズ:12例

[1] 皇子は、かくてもいとお覧ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ例なきことなれば、まかだたまひなむとす。なにごとかあらむともおぼしたらず、さぶらふ人々のなきまどひ、上も御涙のひまなく、ながれおはしますを、あやしとみたてまつりたまへるを、よろしきことにだにかかるわかれのかなしからぬはなきわぎなるを、ましてあはれにいふかひなし。

(「桐壺」9-13)²⁾

[2] 齋院は御服にておりゐたまひにしかば、朝顔の姫君は、かはりにゐたまひにき。賀茂の齋王には、孫王のゐたまふ例おほくもあらざりけれど、さるべき女皇子やおはせざりけむ。大将の君、年月ふれど、なほ御心はなれたまはざりつるを、かう筋ことになりたまひぬればくちをしとおほす。中將におとづれたまふこともおなじことにて、御文などはたえざるべし。昔にかはる御ありさまなどをば、ことになにもおぼしたらず、かやうのはかなしことどもを、まぎるることなきままに、こなたかなたとおほしなやめり。

(「賢木」347-9)

[3] 御鼻の色ばかり、霞にもおとるまじくはなやかなるに、御心にもあらず、うちなげかれたまひて、ことさらに御几張ひきつろへだてたまふ。なかなか女はさしもおぼしたらず、今はかくあはれにながき御心のほどをおだしきものに、うちつけたのみきこえたまへる御さま、あはれなり。

(「初音」771-4)

[4] そのつぎつぎ、なほみなついでのままにこそはと世の人もおもひきこえ、後の宮ものたまはすれど、この兵部卿宮はさしもおぼしたらず、わが御心よりおこらざらむことなどは、すさまじくおほしぬべき御気色なめり。

(「匂兵部卿」1430-5)

[5] たのむにつけては、うらめしとおもふこともあらむと、心ながらおほゆるをりをりもはべりしを、みしらぬやうにて、ひさしきとだえをも、かうたまさかなる人ともおもひたらず、ただ、朝夕にもつけたらむありさまにみえて、心くるしかりしかば、たのめわたることなどもありきかし。

(「帚木」56-4)

[6] ものよりおはすれば、まづいでむかひて、あはれにうちかたらひ、御ふところにいりゐて、いささかうとくはづかしともおもひたらず、さるかたに、いみじくうたきわぎなりけり。

(「若紫」195-7)

[7] ……「森こそ夏のとみゆめれ³⁾」とて、なにくれとのたまふも、にげなく、人やみつけむと心くるしき

を、女はさもおもひたらず／君しこば手なれの駒のかりかはむさかりすぎたる下葉なりとも／といふさま、こよなく色めきたり。 (「紅葉賀」255-7)

[8] 御菌のおひいづるに、くひあてむとて、箭をつとにぎりもちて、雫もよよとくひぬらしたまへば、「いとねぢけたる色このみかな」とて／うきふしもわすれずながらくれ竹のこはすてがたきものにぞありける／と、ゐてはなちてのたまひかくれど、うちわらひて、なにともおもひたらず、いとそそかしうはひおりさわぎたまふ。 (「横笛」1273-3)

[9] 例ならず、いそがしくまでたまひて、人のうへにみなしたるを、くちをしともおもひたらず、なにやかやともろ心にあつかひたまへるを、大臣は、人しれず、なまねたしとおぼしけり。 (「宿木」1729-12)

[10] ふたりして、くるしともおもひたらず、いひみたるに、主は音もせでひれふしたり。かひなをさしいでたるが、まろらかにをかしげなるほども、常陸殿などいふべくはみえず、まことにあてなり。

(「宿木」1783-14)

[11] 「幸ひにうちそへて、なほあやしうめでたかりける人なりや。老の世に、もたまへらぬ女子をまうけさせたてまつりて、身にそへてもやつしむたらず、やむごとなきにゆづれる心おきて、こともなかるべき人なりとぞききはべる」など、かつ御物語きこえたまふ。

(「少女」678-4)

[12] ……女はまして、すかされたるにやあらむ、あすあさてとおもへば、心あわたたしいそがしきに、こなたにも心のどかにゐられたらず、そそめきありくに、……

(「東屋」1804-14)

タラズ形—タラヌ：15例

[13] 中將の君、御供にまゐる。紫苑色のをりにあひたる、羅の裳あざやかにひきゆひたる腰つき、たをやかになまめきたり。みかへりたまひて、隅の間の高欄にしばしひきすゑたまへり。うちとけたらぬもてなし、髪のがり端めざましくもとみたまふ。

(「夕顔」110-5)

[14] また、ゐざりいでて、「かの障子はあらはにもこそあれ」とみおこせたまへる用意、うちとけたらぬさまして、よしあらむとおぼゆ。 (「椎本」1581-3)

[15] 御かたがたの人々、世の中におしなべたらぬをえりととのへすぐりてさぶらはせたまふ。御心につきべき御遊びをし、おほなおほなおほしいたつく。

(「桐壺」27-13)

[16] ……中納言の君、中務などやうのおしなべたら

ぬ若人どもに、たはぶれごとなどのたまひつつ、あつさにみだれたまへる御ありさまを、みるかひありとおもひきこえたり。 (「帚木」63-7)

[17] ……おしのごひたまへる袖の匂ひも、いとところせきまでかをりみちたるに、げによにおもへば、おしなべたらぬ人の御宿世ぞかしと、尼君をもどかしとみつる子どもみなうちしほたれけり。

(「夕顔」104-3)

[18] 尼上には／もてはなれたりし御気色のつつましさに、おもひたまふるさまをも、えあらはしはてはべらずなりにしをなむ。かばかりきこゆるにても、おしなべたらぬ心ざしのほどをご覧じしらば、いかにうれしう／などあり。

(「若紫」172-1)

[19] 「いで、あなかま、たまへ。みなききてもはべり。いといとほしげなるをりをりあなるをや。さるは、世におしなべたらぬ人の御おぼえを。ありがたきわざなりや」といとほしがる。

(「若菜上」1118-4)

[20] 宮は、春宮をあかずおもひきこえたまひて、よるづのことをきこえさせたまへど、ふかうしもおほしいれたらぬを、いとうしろめたくきこえたまふ。

(「賢木」363-5)

[21] 「あぢきなうもあるかな。たはぶれてにても、もののはじめにこの御ことよ。宮きこしめしつけば、さぶらふ人々のおろかなるにぞさいなまむ。あなかしこ、ものついでに、いはけなくうちいできこえさせたまふな」などいふも、それをばなにとおほしたらぬぞあさましきや。

(「若紫」187-5)

[22] 姫宮はなにとおほしたらぬを、御後見どもぞやすからずきこえける。わづらはしうなどみえたまふ気色ならば、そなたもまして心くるしかるべきを、おいらかにうつくしきもてあそびぐさにおもひきこえたまへり。

(「若菜上」1074-12)

[23] 大將の君、かの御車のあらそひをまねびきこゆる人のありければ、いといとほしううしとおぼして、「なほ、あたら、おもりかにおはする人の、ものなさけおくれ、すすくしきところつきたまへるあまりに、みづからはさしもおほさざりけめども、かかるなからひはなさけかはすべきものともおほいたらぬ御おきてにしたがひて、つぎつぎよからぬ人のせさせたるならむかし。御息所は、心ばせのいとほづかしく、よしありておはするものを、いかにおほしうむじにけむ」と、いとほしくて、まうでたまへりけれど、……

(「葵」289-12)

[24] 「いさや。はじめよりしかいひよれることをおき

て、またいはむこそうたてあれ。されど、わが本意は、かの守の主の人柄もものものしくおとなしき人なれば、後見にもせまほしう、みるところありて、おもひはじめしことなり。もはら顔かたちのすぐれたらむ女のねがひもなし。品あてに艶ならむ女をねがはば、やすくえつべし。されど、さびしうことうちはあはぬみやびこのめる人のはてはては、ものきよくもなく、人にも人ともおほえたらぬを見れば、すこし人にそしらるとも、なだらかに世の中をすぐさむことをねがふなり。守に、かくなむとかたらひて、さもとゆるす気色あらば、なにかはさも」とのたまふ。

(「東屋」1798-13)

[25] 「……家の営みたてたらぬ人なむ、いにしへよりなりきにける。したたかにかしこき方のえらびにては、その人ならでも、年月のらうになりのぼるたぐひあれど、しかたぐふべきもなしとならば、おほかたのおほえをだにえらせたまはむ」となむ、……

(「行幸」893-13)

[26] ……「この君たちさへみなすげなくしたまふに、ただ御前の御心のあはれにおはしませばさぶらふなり」とて、いとかやすく、いそしく、下郎、童べなどのつかうまつりたらぬ雑役をも、たちはしりやすくまどひありきつつ、心ざしをつくして宮仕へしありきて、……

(「行幸」909-9)

タラズ形-タラネ：1例

[27] 「いでや、心ばせのほどをおもへば、人ともおほえず、いでぎえはいとこよなかりけるに、なにごといひみたるぞ」とつぶやかかるれど、いと心地なげなるさまは、さすがにしたらねば、いかがといふと、こころみにしめゆひし小萩がうへもまよはぬにいかなる露にうつる下葉ぞとあるに…… (「東屋」1838-1)

タラザリキ形-タラザリシ：1例

[28] かくのみなげきあかしたまへるあけほの、ながめくらしたまへる夕暮などのしめやかなるをりをりは、かのおしなべてにはおほしたらざりし人々を御前ちかくて、かやうの物語などをしたまふ。

(「幻」1406-14)

タラザナリ形-タラザナリ：1例

[29] 「かの大官ももてはなれてもおほしたらざなり。女は宮仕をものうげにおほいたなり」とうちうちの気色も、さるくはしきたよりあれば、もりききて、「ただ大殿の御おもむけのことなるにこそはあなれ。まこ

との親の御心にだにたがはずは」と、この弁のおもにもせめたまふ。(「藤袴」928-10)

タラザメリ形-タラザメレ：1例

[30] 大将の君の御かよひところ、ここかしことおほしあつるに、「この御息所、二条の君などばかりこそは、おしなべてのさまにはおほしたらざめれば、うらみの心もふかからめ」とささめきて、ものなどとせたまへど、さしてきこえあつることもなし。

(「葵」293-13)

タラズナルベシ形-タラヌナルベシ：1例

[31] 宮たちときこゆるなかにも、筋ことに世人おもひきこえたれば、いくたりもいくたりもえたまむことも、もどきあるまじければ、人も、この御方いとほしなどおもひたらぬなるべし。(「宿木」1727-14)

タラジ形-タラジ：3例

[32] 二郎がかたられとられたるも、いとおそろしく心うくて、この豊後介をせむれば、「いかがはつかうまつるべからむ。かたらひあはすべき人もなし。まれまれのはらからは、この監におなじ心ならずとて、なかつたがひにたり。この監督あたまれては、いささかの身じろきせむも、ところせくなむあるべき。なかなかなる目をやみむ」とおもひわづらひにたれど、姫君の人しれずおほいたるさまのいと心くるしくて、いきたらじとおもひしづみたまへる、ことわりとおほゆれば、いみじきことをおもひかまへていでたつ。

(「玉鬘」727-12)

[33] 世の中にもりきこえて、「前斎院、ねむごろにきこえたまへばなむ、女五の宮などもよろしくおほしたなり。にげなからぬ御あはひならむ」などいひけるを、対の上はつたえききたまひて、しばしは、「さりとも、さやうならむこともあらばへだててはおほしたらじ」とおほしけれど、…… (「朝顔」645-9)

[34] 「いで、さいふとも田舎びたらむ。をさなくよりさるところにおひいでて、ふるめいたたるおやにのみしたがひたらむは」「母こそゆゑあるべけれ。よき若人、童など、都のやむごとなきところどころより類にふれてたづねとりて、まばゆくこそもてなすなれ」「なさけなき人なりてゆかば、さて心やすくてしもえおきたらじをや」などいふもあり。

(「若紫」155-4)

タラデ形：3例

[35] 尼君、「いで、あなをさなや。いふかひなうものしたまふかな。おのがかく今日明日におほゆる命をばなにともおぼしたらで、雀したひたまふほどよ。罪うつることぞとつねにきこゆるを、心うく」とて、「こちや」といへば、つゐるたり。（「若紫」157-3）

[36] この春うせたまひぬる式部卿宮の御むすめを、継母の北の方ことにあひおもはで、兄の馬頭にて人柄もことなることなき心かけたるを、いとほしうなどもおもひたらで、さるべきさまになむちぎるときこしめすたよりありて……（「蜻蛉」1975-9）

[37] 古代の祖母君の御なごりにて、齒ぐるめもまだしかりけるを、ひきつくろはせたまへれば、眉のめぎやかになりたるもうつくしうきよらなり。心から、などかかうき世をみあつかふらむ、かく心くるしきものをもみてゐたらでとおぼしつづ、れいのもろともに難あそびしたまふ。（「末摘花」229-12）

タラズ形等の使用例は、以上の37例である。これらの使用例からすると、タラズ形には、以下のような使用傾向があるとかんがえられる。

- ①連用形の使用例が思考動詞に集中すること
- ②連体形では特定の状態表現の例がみられる
- ③複合形の使用例があり助動詞キが下接すること
- ④あきらかな文の終止の例がみられないこと
- ⑤タラジ形・タラデ形の使用例も少数あること

①は、上接する動詞が限定されている点である。連用形では、「おぼす」「おもふ」が[1]から[10]までであり、それ以外は2例のみである。これらの10例は、本来問題視すべきことがあるのに、それを軽視していたという文脈で使用され、たとえば、[1]は母桐壺更衣の死という事態に際して息子光源氏はまだおさないがゆえにかなしさも感じていないという例である。これら10例はいずれも助詞モとともに使用される。ほかに、「トモ」「シモ」と、よりその点が強調される使用例もある。「～も」ということで、モで規定されたことが軽視されることがしめされる。

このモと思考動詞との使用例は、タラズだけでなく、タラヌの[20]から[24]の5例、タラデの[35][36]の2例と、タラズ形のなかの17例と半数をしめるものである。

②は、[13][14]の「うちとけたらぬ」の2例、[15]から[19]までの「おしなべたらぬ」の5例が

該当する。いずれも人の様子や行為を説明するための修飾語句である。それも特定の動詞をもちいてのものであることが注意される。

③は、タラズ形にさらに助動詞が下接する例である。とくに、注意されるのは、[28]のタラザリシで、タラズに助動詞キが下接する。この例からすると、タラズ形とザリキ形とは共起しうることとなり、おなじ否定表現でのテンス・アスペクトをしめすものではありながら、同一のレベルで機能する表現ではないとかんがえられる。

④は、タラズでの使用例が、基本的に従属節として機能し、あきらかに文の終止する例がないことと、「ゾータラヌ」のような係り結びで文の終止をしめす例もないことを意味する。当然のことながら、ザラヌの例も連体修飾をしめす連体節の例と副詞節の例だけである。これは、ザリキ形などが、ザリキ(15例)・ザリツ(3例)・ザリケリ(43例)と、終止形での文末専用の例をもつこととは対照的な点である。

⑤では、タラジ形は文の終止をしめすが、これについては、タラム形との比較が必要であり、本稿では検討を保留したい。なお、タラズ形ではタラザナリ形・タラザナル形・タラズナルベシ形と、いわゆるムードをしめす推量系助動詞の下接する例のあることも特徴である。

タラデ形は、さきにもふれたように、[35][36]とタラズの使用例と類似した用法である。

タラズ形は、使用例も少数であるうえ、その使用例も特定の動詞等に集中する。また、助動詞キと共起して、タラザリキ形があることは、タラズ形の用法をかんがえるうえで、重要な点である。

3-2 ラズ形の使用例

つぎに、源氏物語でのラズ形とラデ形の使用例をあげる。

ラズ形ーラズ：4例

[38] あながちになどかかづらひまどはば、たふるる方にゆるしたまひもしつべかめれど、つらしとおもひしをりをり、いかで人にもことわらせたてまつらむとおもひおきしわすれがたくて、正身ばかりには、おろかならぬあはれをつくしみせて、おほかたにはいられおもへらず。せうとの君たちなども、なまねたしなどのみおもふことおほかり。（「蜩」821-10）

[39] 心ざしふかからむ男をおきて、みる目の前につらきことありとも、人の心のみしらぬやうににげかく

れて、人をまどはし心をもみむとするほどに、ながき世のものおもひになる、いとあぢきなきことなり。「心ふかしや」などほめたてられて、あはれすすみぬれば、やがて尼になりぬかし。おもひたつほどは、いと心すめるやうにて、世にかへりみすべくもおもへらず、「いで、あなかなし。かく、はた、おほしなりにけるよ」などいふやうに、…… (「帚木」45-2)

[40] 「ことごとのすぢに、花や蝶やとかけばこそあらめ、わが心にあはれとおもひ、ものなげかしきかたごまのことをいかにととふ人は、むつまじうあはれにこそおほゆれ。大宮のうせたまへりしを、いとかなしとおもひしに、致仕の大臣のさしもおもひたまへらず、ことわりの世のわかれに、おほやけおほやけしき作法ばかりのこを孝じたまひしに、つらく心づきなかりしに、六条院のなかなかねむごろにのちの御ことをもいとなみたまうしが、わがかたごまといふなかにも、うれしうみてたまつりし。……」 (「夕霧」1344-6)

[41] 昼寝の君、風のいとあらきにおどろかされて、おきあがりたまへり。山吹、薄色などはなやかなる色あひに、御顔はことさらにそめにほはしたらむやうに、いとをかしくなばなとして、いささかものおもふべきさまもしたまへらず、「故宮の夢にみえたまひつる、いとものおほしたる気色にて、このわたりにこそほのめきたまひつれ」とかたりたまへば、いとどしくかなしさそへて、「うせたまひてのち、いかで夢にもみたてまつらむとおもふを、さらにこそみたてまつらね」とて、ふたところながら、いみじくなきたまふ。(「総角」1649-13)

ラズ形ーラヌ：2例

[42] 女君は、君達におどろかされて、ゐざりいでたまふにぞ、われもいまおきたまふやうにてよろづにうかがひたまへど、えみつけたまはず。女は、かくもとめむともおもひたまへらぬをぞ、げに懸想などなき御文なりけりと心にもいれねば、君達のあわてあぞびあひて、雛つくりたまひすゑてあそびたまふ、……

(「夕霧」1333-11)

[43] 「幸ひにうちそへて、なほあやしうめでたかりける人なりや。老の世に、もたまへらぬ」女子をまうけさせたまつりて、身にそへてもやつしゐたらず、やむごとなきにゆづれる心おきて、こともなかるべき人なりとぞききはべる」など、かつ御物語きこえたまふ。(「少女」678-3)

ラザリキ形ーラザリシ：1例

[44] 御かたちなどなまめかしうきよらにて、かぎりなき御心ざしの年月にそふやうにもてなさせたまふに、めでたき人なれど、さしもおもひたまへらざりし気色心ばへなどものおもひしられたまふまに、などでわが心のわかきいはけなきにまかせて、さるさわざをさへひきいでて、わが名をばさらにもいはず、人の御ためさへなどおほしいづるに、いとうき御身なり。(「滯標」484-10)

ラザリキ形ーラザリシカ：1例

[45] 「……それにねたみて、つひに今のをばころしてしぞかし。さてわれもすみはべらずなりにき。国にもいみじきあたら兵うしなひつ。また、このあやまちにたるもよき郎党なれど、かかるあやまちしたるものを、いかでかはつかはむとて、国のうちをもおひらはれ、すべて女のたいだいしきぞとて、館ののうちにもおいたまへらざりしかば、東の人になりて、ままも、今に、こひなきはべるは、罪ふかくこそみたまふれ。……」 (「浮舟」1912-11)

ラデ形：1例

[46] やむごとなきよりも、典侍腹の六の君とか、いとすぐれてをかしげに、心ばへなどもたらひておひいでたまふを、世のおほえのおとしめざまなるべきしもかくあたらしきを心くるしうおほして、一条宮の、さるあつかひぐさもたまへらで、さうざうしきに、むかへとりてたてまつりたまへり。

(「匂兵部卿」1439-12)

ラズ形等の使用例は、以上の9例である。これらの使用例からすると、ラズ形には、以下のような使用傾向があるとかがえられる。

- ①使用例がタラズ形以上に少数であること
- ②連用形等で思考動詞の使用例がおおいこと
- ③複合形ラザリキ形の使用例があること
- ④文の終止とも考えられる使用例があること
- ⑤ラデ形の使用例があること

①については、タラズ形等が37例であるのに対して、わずか9例であり、助動詞り自体の使用数に比しても非常に少数である。

②は、タラズ形と同様の傾向であり、「おもふ」やそれに尊敬補助動詞の下接した「おもひたまふ」等の

使用例がある。[38] [39] [40] [42] [44] が該当し、半数以上が思考動詞であり、タラズ形同様に、助詞モとともに使用され、状況をそれほど重要とは把握していないことをしめす例が中心である。

③は、タラザリキ形が存在するように、ラザリキ形も存在することである。

④は、タラズ形とは相違する点で、[38] 1例ではあるが、文の終止として、句点を付す可能性のたかい例が存在する。ただし、大部分が副詞節として、以下の文脈につらなるものと理解可能で、タラズ形と、おおきく相違するわけではない。

⑤は、[46] のラデ形があり、タラズ形と同様の使用傾向である。

なお、タラズ形とちがひ、連体形タラヌの使用例が少数であることから、タラズ形の③のような特定の状態表現の使用例はない。これは助動詞リ自体が、特定の動詞「おもふ」「たまふ」等に使用が集中するという点からすると、当然の結果ともいえる。

3-3 タラズ形とラズ形の使用傾向

以上検討してきたことからすると、ラズ形とタラズ形の使用傾向は、ほぼ同様のものとみなしてよいとかがえられる。

とりわけ、注意されるのは、思考動詞等での特定の使用傾向での例がおおいこと、助動詞キが下接するラザリキ形・タラザリキ形が両者に存在すること、それに、文末で使用される例が非常にすくないことの3点である。

第1の点は、タラズ形・ラズ形の使用数のすくないことにつながる。また、第2の点は、タリ・リとキ・ツ・ケリが、タリケリ・リキの例があるように、使用される相互承接の順序がことなり、共起可能であることに通じる。これは、タリ・リとキ・ツ・ケリは、否定表現においては、文中での機能するレベルが相互承接上からすると相違することになる。

第3の点は、文末で使用されないということから、文のテンス・アスペクトを確定する機能をもたないことにつながる。しかし、助動詞タリ・リ自体は、肯定表現のタリ・リの語形で文末で使用されることは非常におおく、西田(2002)の調査では、タリが係り結び等もふくめて781例、リも1064例である。

これは、助動詞キ・ケリ・ツが、肯定表現・否定表現ともに文末で使用されるのとはおおきくことになっている⁹⁾。

そこで、この点をさらに検証するために、副詞節で

の使用例が、どのような使用状況にあるのかを、次節で検討する。

4 タラズ形・ラズ形の副詞節での使用例

さきにあげた、[1] から [12] までのタラズ形の例では、タラズ形が使用される副詞節での文末の述語の語形を確認すると、その大部分が、物語での「話」の進行時点である「現在」をしめすものである。

たとえば、[1] の「おぼしたらず」は「いふかひなし」が文末述語である。この母桐壺更衣の死の話がつづくなかで、光源氏は「なにごとがあるのだろうかとおもいなさっていないで」と、「おもわない」という状態が継続していることをしめしているとかんがえられる。そして、それが周囲のあわれをさそうことにもなる、と文末述語でまとめられる。ここでの「おぼしたらず」は、テンスの面では過去をしめすのではなく、現在の状態をしめすものとみるべきであろう。

また、[2] は「おぼしたらず」で文末述語が「おぼしなやめり」、[7] は「おもひたらず」が「色めきたり」のように、タリ・リの文末述語の例もあり、これらも思考の結果が現在にまで状態として継続していることをしめしているとみることができる。

そのようななかで、[5] と [9] が、文末述語のテンスが問題となる。

[5] では、雨夜の品定めでの過去の女性との関係をかたっているときに、相手の女性が自分のことを「たまにしかこない人とおもっていないで」いるのが、心ぐるしかったとある。この例では、物語の現在からすると、過去の時点での女性の心理状態を説明している。

[9] では、薫が夕霧右大臣の娘が匂宮の妻となったことに「残念とおもっていない」うえに「あれこれと気づかひするのを」、夕霧右大臣がこにくらしいとおもったとある。この例は地の文ではあるが、[5] と同様の例とかんがえられる。

これら2例のばあい、ある時点におけるなんらかの心理状態を説明しているものである。おおくの例では、その時点が文末述語の時点と一致するのであるが、これらのように、物語の「話」の進行時点である現在とことなる例もありうることになる。

しかし、[1] から [12] いずれの例も、ある時点での状態の表現という点では通じるものがある。タラズ形の副詞節での使用例は、物語の進行時点のテンスをしめすだけのものではなく、ある時点での状態を表現

するものとして理解される。ただし、それはあくまでも状態の表現であり、物語における過去の時点を積極的にしめすものではない。

ザリキ形・ザリツ形・ザリケリ形が、文末表現専用の終止形の使用例をもつものに対して、タラズ形・ラズ形は、連用形と終止形が同一の形態であり、それを明確にしめすことができない。この点からすると、ザリキ形・ザリツ形・ザリケリ形とタラズ形・ラズ形とでは、文中での機能がことなるものとかがえるべきなのである。

5 おわりに

源氏物語におけるタラズ形・ラズ形は、ザリキ形・ザリツ形・ザリケリ形と比較すると、その使用例もすくない。また、タラザリキ・ラザリキの使用例があることから、タラズ形・ラズ形とザリキ形の文中でののはたらきが相違するとかがえられる。

さらに、タラズ形とラズ形が文末での使用例がほとんどないことから、その使用範囲の限定されていることが理解される。タラズ形・ラズ形は、源氏物語においては、否定表現のテンス・アスペクトをしめす語形としては、主要なものではないということになる。

源氏物語をはじめとする中古語の否定表現でのテンス・アスペクトについては、これらの語形の役割分担、さらにはもっとも基本的な語形である助動詞ズの

しめすテンス・アスペクトについて、検討する必要がある。これらについては、今後の課題としたい。

注

- 1) 調査は、上田他(1996)による。
- 2) 源氏物語の引用は、池田(1953)による。その引用に際して、適宜、かなづかいをあらため、濁点をほどこし、漢字をあて、句読点をつけた。また、必要に応じて、下線を付した。
- 3) 「みゆめる」とあるのを「みゆめれ」と諸本により校訂。
- 4) 「もたまつらぬ」をあるのは「もたまへらぬ」と諸本により校訂。
- 5) 西田(2002)の調査では、それぞれ係り結びの例もふくめての文末使用例は、キが240例、ケリが1230例、ツが241例である。

参考文献

- 池田亀鑑 1953『源氏物語大成校異篇』1~3(中央公論社—引用は9版による)
- 上田英代・村上征勝・今西祐一郎・樺島忠夫・藤田真理・上田裕一共編 1996『源氏物語語彙用例索引付属語篇』1~5・別冊(勉誠社)
- 西田隆政 2002「源氏物語における「たり」「り」の文末用法—係り結びの使用頻度と文体差との関連をめぐって—」(『甲南女子大学研究紀要』第38号文学・文化編)
- 西田隆政 2007「源氏物語でのザリキ形・ザリツ形・ザリケリ形—否定表現におけるテンス・アスペクト—」(『甲南女子大学研究紀要』第43号文学・文化編)